

凄惨な現場、極限状態の任務…陸自隊員の心を 支えていた住民からのメッセージ



名取市から撤収する際に目にした、自衛隊へ感謝を伝えるメッセージ(陸上自衛隊提供)

◇東日本大震災から10年 あの日あの時3. 11

発生から10年を迎える東日本大震災の記憶と教訓を伝える連載「あの日 あの時」。第10回は、震災直後に宮城県名取市に入り、人命救助の任務に当たった陸上自衛隊の奥田幸義3等陸佐(51)。阪神大震災時も派遣されたベテラン隊員だが、名取で直面したのは想像をはるかに超える惨状でした。

当時、愛知県の第35普通科連隊第3中隊長だった奥田さん。守山駐屯地から隊員約80人とともに震災翌日の12日朝、名取に入った。阪神大震災の時は、地震で崩壊した家屋からの人命救助を行った。被災地の惨状は知っているはずだった。しかし、言葉を失った。町ごとなくなっていたからだ。ヘドロの臭いが鼻をつき、見渡す限りがれきの山が広がっていた。

「辺り一面、家がばらばらになって流し尽くされていた。人の姿もありませんでした」。形をとどめていたのは、海から約2キロ内陸に入った高速道路だけ。その土手が堤防のような役割をして、集まった建物の柱や屋根などが二重三重に積み重なっていた。人も同じように流され、このがれきの下にいるとみられた。

生存率が急速に下がるとされる「発生から72時間」のタイムリミットが迫

っていた。「生存者を発見しなければ。一刻も早く」。昼はもちろん、夜もヘルメットについて小さな照明を頼りに、一つ一つがれきを手作業で取り除きながら不眠不休であちこちを捜し回った。がれきの下は土砂が積もっていたが、長い鉄の棒を使って探り続けた。しかし、生存者を見つけることはできなかった。5月下旬にまで及んだ捜索で、隊が見つけた遺体は320体に入った。

忘れられない光景がある。津波で押しつぶされた車の中から母子の遺体が見つかった。「お母さんが子供に覆いかぶさるようにして亡くなっていました。避難の途中に津波に襲われ、必死に子供を守ろうとしたのでしょう」。多くの遺体から、津波にのまれる直前の思いが見える気がした。3児の父である奥田さんの胸が締め付けられた。

町外れにある田んぼの側溝で、消防団の服を着た若い男性の遺体を見つけた。現地に入った直後、地元消防団から「最後まで住民の避難誘導に当たっていた仲間が、消防車もろとも津波にのまれた」と捜索を頼まれていた。思いつく限りを捜し回ったが、発見に至らず、もう一度同じ場所を捜した。「この人だ。やっと見つけることができた」。消防団員の服は辺りを襲った火に燃やされ、ボロボロになっていた。震災から2カ月が過ぎていた。

消防団員の父親と会った時の言葉が忘れられない。「わざわざ私の居場所を探し、お礼を言いに来てくださった。“発見していただきありがとうございます。これで息子の葬儀をしてやることができます”と」。住民を避難させるために命を落とした息子を思う気持ちに触れ、涙があふれた。

多くの凄惨（せいさん）な現場を踏んできた隊員たちにとっても名取での捜索は極限状態の任務だった。「遺体収容が辛い」。若い隊員から相談があった。任務には感情を抑えて当たってきたが、このままでは持たない。「つらかったことをお互い話すことによって少しでも精神的なケアになれば」と任務を終えた夜に隊員同士がグループになって精神的な思いを話し合える場を設けた。

災害現場で捜索活動に当たる自衛隊員が、あまりに凄惨な現場で精神的ショック（惨事ストレス）を受けることは珍しくない。東日本大震災後、救出活動に当たった自衛隊員から惨事ストレスに起因したとみられる自殺者が出て問題になった。奥田さんが設けた「隊員同士の話し合いの場」は日々のストレスを組織で軽減するのに効果的とされ、現在では「任務解除ミーティング」として全国の部隊に広まっている。

隊員たちの心を支えたのは、住民からの感謝の言葉だった。捜索現場への移動中、ブロック塀に書かれた「35普通科連隊のみなさんの働き忘れません。」

のメッセージを目にして勇気づけられた。全ての任務を終えた5月24日、帰還の途に就くと道の両側にたくさんの住民が待っていた。「ありがとう」と書かれたプラカードを掲げて見送ってくれた人もいた。

命を救うことはできなかった。遺体を家族の元に送り届けることしかできなかった。それでも意味があったと思えた瞬間だった。

現在、奥田さんは水陸機動連隊に所属している。災害を含めた有事の際、真っ先に最前線に向かう。「経験の浅い隊員の中には“自分が活動できるのだろうか”と不安を抱く者もいる。“日々の訓練をこなしていれば大丈夫”ということを災害派遣の任務を経験した者として伝えたい」。あの名取での経験が未来の命を救う糧になったと信じている。(岸 良祐)

《数多くの品物、念入りに収集》がれきの撤去作業中には、数多くの写真や卒業アルバム、ランドセルなどの“誰かの思い出の品”も見つかった。隊員らは「どんなに汚れていてもがれきと同じようには扱えない」と丁寧により分けた。奥田さんは名取市に相談して閑上（ゆりあげ）小学校の体育館に集めることに決め、隊員らは一日の活動が終わるたびに、見つけた品々を可能な限り持ち帰った。隊が名取を離れる頃には、体育館の壁や床を埋め尽くす量となり、多くの人が家族の思い出を探しに訪れた。